

入選

心に余裕を、人に優しさを

福岡県 照曜館中学校

二年 葛城 濤

私はずっと、人はみな、親切であるべきだと思っていた。親切であること。それが私の理想だった。しかし、あることがきっかけで、私は心の底からはそう思えなくなった。

午後 9 時。すっかり日は暮れてしまったが、街中は店の明かりがこうこうと照らして明るい。歩行者信号が赤になった。多くの車が走り出す。すると突然、信号は赤だというのに、男性が横断歩道を渡り始めた。車が近づいてきた。「あぶない！」そう思ったが、とっさに体が動かなかった。

「すみません！ 止まってください！」

誰かが車に止まるよう頼みながら、男性の腕を引き、向こう側まで連れていった。

それは、母だった。信号が青になった。急いで母の方に向かう。母は男性と話していた。男性は目が見えないので、杖をついて横断歩道を渡っていたらしい。

ふと、疑問に思った。信号が青かどうかは、あの特徴的な「カッコウ」の音でわかるはずではないか。そのあと、男性が母に困ったように話し始めた。

「夜 8 時を過ぎると、このあたりの信号機は音が鳴らなくなるんです。近隣の人たちが、うるさいと言うからだそうで。毎回ひやひやしながら渡っていますよ。」

驚いた。目の見えない人たちが、そんなに不便を強いられているとは、知らなかった。母に何度も感謝して、男性は去っていった。

「お母さん、よく動けたね。」

「あぶないって思っただけよ。でも、不便よね。音が鳴る時間を延ばせたらいいのに。」

「そうだね……。」

私の心には、まだなにかが引っかかっていた。母のように、人を助けることはよいことだ。しかし、それで命を失ってしまったら……。

今回は、母はけがもしなかった。けれども、もし母の身になにかあったらと思うと、ぞっとした。

自分の命よりも他人の命を優先できる人は、たしかに心優しい人だろう。だが、命は一つしかない。一度失えば、もう戻ってこないのだ。

だからといって、自分だけを大切にすれば良いとは思わない。誰もが社会を構成する一員なのだから。そこで、私が大切だと思うのは、生きやすい環境を作ることだ。今回の件で言えば、信号機の音が鳴る時間を、音量を調整しながら延長するという風に。

もちろん、そうすることでうるさいと感じるなど、不愉快に思う人も出てくるだろう。そういう意見を聞いた上で、我慢を知られている人が、もっと生きやすくなれば良いと思う。

そんな社会になれば、命の危険もなくなり、「小さな親切」もしやすくなる。「小さな親切」は心に余裕がないとできない。心に余裕を持つことができれば、人にも優しくなれる。

優しさは作れる。みんなで作れるのだ。